

## 恋愛関係における嫉妬の研究

深田博己・坪田雄二

A study of romantic jealousy

Hiromi Fukada and Yuji Tsubota

This study investigated how rejection by romantic partner before separation has influences on five variables, that is, threat to relationship reward, threat to self-esteem, romantic jealousy, anger, and anxiety.

The results showed that the greater rejection of romantic partner was, the stronger romantic jealousy, anger, and anxiety were. It is suggested that threat to relationship reward and threat to self-esteem aroused these emotions. In addition, we pointed out that it was important to consider the components and structure of romantic jealousy in examination of romantic jealousy.

KEY WORD: romantic jealousy, threat to relationship reward, threat to self-esteem

嫉妬という感情は誰もが経験する対人感情であり、嫉妬に基づく葛藤は、神話や小説の中に取り上げられている。このような嫉妬には、エディプス・コンプレックスに代表される親子関係における子供の嫉妬、あるいは教師をめぐる生徒間の嫉妬、恋愛関係における嫉妬など様々なものがあるが、その中でも恋愛関係における嫉妬がもっとも強烈であると言われている。そこで、本研究では嫉妬の中でも恋愛関係における嫉妬を取り上げた。

この恋愛関係における嫉妬に関して、古くから様々な考察がなされている。例えば、White (1981)は、嫉妬の原因として考えられてきたものを次の4つにまとめている。①自尊心が脅かされる結果 (Fenichel, 1955; Mead, 1931)。②根底にある罪の知覚の結果 (Jones, 1930)。③価値ある関係を失うことへの恐れ (Bohm, 1961; Spielman, 1971)。④一夫一婦制の本能の結果 (Darwin, 1988; Westermarck, 1936)。この中でも、White (1981)は自尊心への脅威と価値ある関係を失うことへの恐れが嫉妬の根源であるとしている。また、Clanton (1981)は、嫉妬を価値ある関係を失うことへの恐れ、それに関連する幸福感、自尊心への脅威に対する保護的な反応であるとしている。

しかし、恋愛関係における嫉妬に関する実験的な検討はごく最近始められたものであり、上述の嫉妬の原因に関するWhite (1981)やClanton (1981)の考察を

実験的に検討したものはMathes, Adams, & Davies (1985)があるにすぎない。

Mathes et al. (1985)は、嫉妬を引き起こす場面には恋人からの拒否が介在すると仮定し、恋人からの拒否の有無によって場面を操作し検討を行った。具体的には、恋人の転勤による別離の場面、恋人の直接的な拒否による別離の場面、ライバルに恋人を奪われた場面(以上3つが拒否あり場面)、恋人を交通事故で失った場面(拒否なし場面)の4場面を用い、その際の価値ある関係を失うことへの恐れ(孤独感)と自尊心喪失の恐れ、嫉妬を評定させた。その結果、自尊心喪失の恐れは、拒否あり場面のほうが拒否なし場面よりも高く、拒否あり場面の間にも違いが見られたが、価値ある関係を失うことへの恐れは、拒否なし場面のほうが拒否あり場面よりも高くなっていた。そして、嫉妬は、自尊心喪失の変化と同様の変化を示していた。このことから、嫉妬の生起プロセスには、自尊心喪失の恐れが介在することが示唆されたが、価値ある関係を失うことへの恐れは嫉妬とまったく対応が見られず、Mathes et al. (1985)の研究からは価値ある関係を失うことへの恐れが嫉妬の生起に介在していることは示されなかった。

ところで、ここまで述べてきたMathes et al. (1985)の研究は、恋人との関係がすでに絶たれた場面を用いている。しかし、嫉妬を感じる状況は、恋人との関係

がすでに絶たれた状況だけでなく、恋人との関係が絶たれる以前で、ライバルが存在しているような状況も考えられる。特に、Mathes et al. (1985)の研究で、価値ある関係を失うことへの恐れの変化が、嫉妬の変化と対応していなかったという結果も、彼らが使用した場面に影響を受けて、つまり、すでに恋人との関係が絶たれた状況であるために、関係を失うことへの恐れ自体が存在しにくい状況であったことが原因の1つとして考えられる。そこで、本研究では、恋人との関係が絶たれる以前の状況を用い、このような状況において、拒否の程度が自尊心喪失の程度、価値ある関係を失うことへの恐れ、嫉妬などにどのような影響を与えるのか、その資料を得ることを目的として実施した。

## 方 法

現在、あるいは過去の恋人を想起させ、その相手からの拒否の程度を操作した5つの場面を用いて、その際の被験者の嫉妬、怒り、不安などを質問紙法で測定した。

**被験者** 大学生 219名の中から、想起した相手が、「相愛しており、彼(彼女)は自分の恋人だという確信がある」、「お互いに結婚を考えている」という関係にある(あった)者、男子43名、女子69名、計112名を被験者とした。

**手続き** 質問紙で、嫉妬を感じるであろうと思われる場面(以下、嫉妬場面)を4つ、そして、両者の関係が順調である場面(以下、統制場面)を1つ、の計5場面を呈示し、その際、被験者がどのように感じるか、6つの従属変数に関して測定した。

呈示した場面は、恋人からの拒否の程度が異なるものを予備調査により設定した。予備調査では、16の嫉妬場面における拒否の程度を「どの程度拒否されていると思うか」、「どの程度自分への関心が薄れていると思うか」、「どの程度ないがしろにされていると思うか」の3項目を用いて、39名の大学生に5段階で評定させ、その結果、拒否の程度の3項目の平均値が等間隔で、標準偏差がそれほど大きくない場面を選択した(表1)。

このようにして選択した5つの場面を想起させやすくするために、恋愛感情を抱いている(抱いていた)相手を思い起こさせ、その相手のイニシャルを呈示文の空欄に記入させた。そして、呈示した場面がその相手と被験者自身との間に起こったと想定し、その場面をなるべくリアルに想像するように教示した。

従属変数は、予備調査で行った拒否の程度に関する3項目、価値ある関係を失うことへの恐れに関する2項目(どの程度相手を失ってしまうかもしれないと思

表1 拒否の程度を操作した場面

〈統制場面〉	
場面1	: 先日、あなたは、( )と二人きりでドライブに $\bar{X}=1.31$ 行って、楽しい一日を過ごした。 $SD=0.86$
〈嫉妬場面〉	
場面2	: あなたは、道で、( )が、とてもカッコいい男 $\bar{X}=2.18$ 性(かわいい女性)と、親しげに話しながら歩い $SD=1.05$ ているのを見た。
場面3	: あなたは、友達から、「この間、( )がとてもカ $\bar{X}=2.90$ ッコいい男性(かわいい女性)と二人きりで映画 $SD=0.94$ を見ていたよ。」と聞かされた。
場面4	: あなたは、友人から、「( )には、あなたの他に、 $\bar{X}=3.62$ とてもカッコいい彼氏(かわいい彼女)がいる」 $SD=1.18$ と教えられた。
場面5	: あなたは、偶然( )の部屋で十数枚の写真を見 $\bar{X}=4.23$ てしまい、1週間前( )が行った2泊3日の旅 $SD=0.99$ 行は、とてもカッコいい男性(かわいい女性)と 二人きりだったことを知った。

表中の $\bar{X}$ ,  $SD$ は予備調査における平均値と標準偏差を示している。

うか、どの程度相手との関係が今までと同じようにうまくいくと思うか)、自尊心喪失への恐れ(どの程度プライドが傷つくと思うか)、怒り(どの程度腹が立つと思うか)、不安(どの程度不安になると思うか)、嫉妬(どの程度嫉妬を感じると思うか)の計9項目とし、7段階評定を行わせた。

なお、5つの場面の呈示順序は被験者間で無作為とした。

## 結 果

まず、最初に複数の項目で測定した拒否の程度、価値ある関係を失うことへの恐れそれぞれについて、各項目間の相関係数を求めた。その結果、拒否の程度に関して、3項目間に高い相関が得られたため(.906, .879, .854,  $n=560$ )、拒否の程度に関する3項目の合計点を拒否の程度の得点とした。そして、価値ある関係を失うことへの恐れに関しても、高い相関が得られたため(-.797,  $n=560$ )、得点が高いほど価値ある関係を失うことへの恐れが高くなるように変換して、2項目の合計点を得点とした。

次に、6つの従属変数に対して、被験者の性と拒否の程度を操作した場面の効果を検討するために、性(2)×場面(5)の2要因の分散分析を行った。その結果を従属変数ごとにまとめた。

### 拒否の程度の認知

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=302.375$ ,

$p < .01$ が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、場面による平均値の差異は予備調査の結果と同様のものであった(表2)。このことから、用いた場面による拒否の程度の操作は有効なものであったと考えられる。

表2 性×場面ごとの拒否の程度の認知

	場面1	場面2	場面3	場面4	場面5
男性 ( $n=43$ )	3.35 (0.91)	7.35 (4.06)	11.07 (4.93)	13.86 (4.39)	17.05 (4.39)
女性 ( $n=69$ )	3.41 (1.25)	8.01 (3.82)	12.49 (4.41)	15.54 (4.63)	17.52 (4.12)

( )内の数値は標準偏差。

### 価値ある関係を失うことへの恐れ

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=288.467$ ,  $p < .01$ )が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、拒否の程度が高い場面ほど恋人との関係を失うことへの恐れも高くなっていった。また、性の主効果も有意であり ( $F_{(1,110)}=3.834$ ,  $p < .01$ ), 女性のほうが関係を失うことに対する恐れが高かった(図1)。

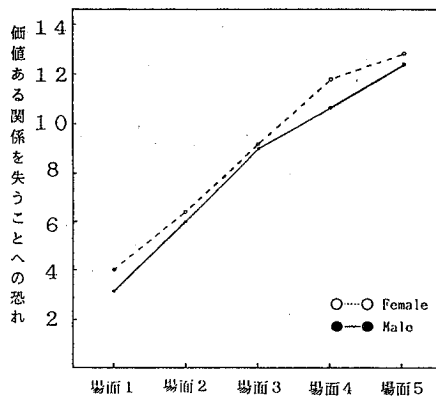


図1 性×場面ごとの価値ある関係を失うことへの恐れ

### 自尊心喪失への恐れ

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=298.163$ ,  $p < .01$ )が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、拒否の程度が高い場面ほど自尊心が傷つけられる恐れが高くなっていった(図2)。

### 嫉妬

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=274.612$ ,  $p < .01$ )が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、拒否の程度が高い場面ほど嫉妬が強くなっていった(図3)。

### 怒り

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=266.815$ ,  $p < .01$ )が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、拒否の程度が高い場面ほど怒りが強くなっていった(図4)。

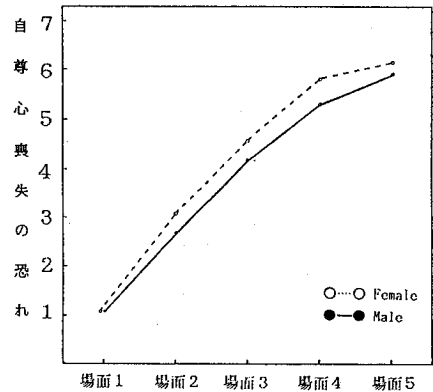


図2 性×場面ごとの自尊心喪失への恐れ

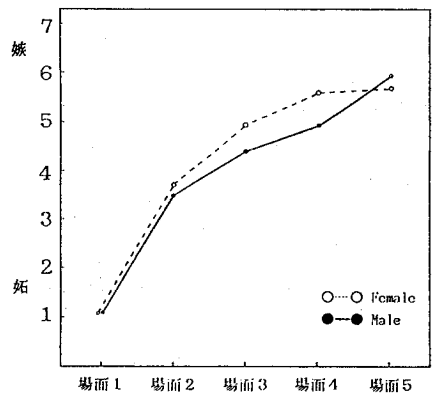


図3 性×場面ごとの嫉妬

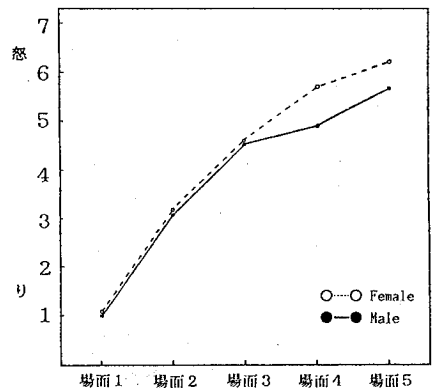


図4 性×場面ごとの怒り

## 不安

分散分析の結果、場面の主効果 ( $F_{(4,440)}=195.718$ ,  $p<.01$ )が有意であり、下位検定の結果、各場面間に有意差が見られ、拒否の程度が高い場面ほど不安が強くなっていた。また、性の主効果も有意であり ( $F_{(1,110)}=3.839$ ,  $p<.05$ )、女性のほうが不安が強かった (図5)。

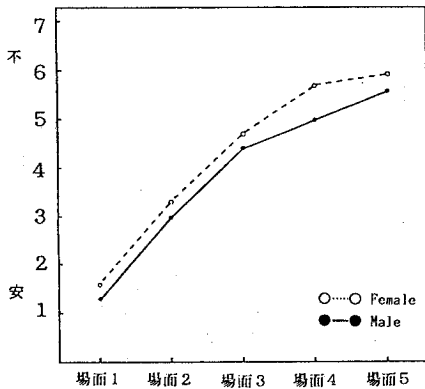


図5 性×場面ごとの不安

## 考察

本研究では、恋人との関係が絶たれる以前の状況において、恋人からの拒否の程度が、嫉妬などの感情や嫉妬の原因と考えられている価値ある関係を失うことへの恐れと自尊心喪失にどのような影響を与えるのかを検討した。

その結果、いずれの従属変数も、拒否の程度に応じて1次関数的に増加していた。つまり、拒否の程度による嫉妬の変化と拒否の程度による価値ある関係を失うことへの恐れと自尊心喪失の変化が対応していたということである。このことから、従来の考察で嫉妬の原因と考えられてきた両変数が、嫉妬の生起プロセスに関係している可能性が示唆された。しかし、Mathes et al. (1985)の研究では、価値ある関係を失うことへの恐れの変化が嫉妬の変化と対応していない。この原因は、次のようなものが考えられる。目的のところでも述べたように、Mathes et al. (1985)の研究で用いられた場面が恋人との関係がすでに絶たれた場面であるため、価値ある関係を失うことへの恐れが生じにくい場面であったことがあげられる。そして、このこととも関係しているが、価値ある関係を失うことへの恐れは測定方法の違いがあげられる。本来、この変数は恋人との関係が絶たれてしまうのではないかとこの恐れを測定すべきものであるが、Mathes et al. (1985)の研

究は、用いた場面が恋人との関係がすでに絶たれた場面であるため、恋人との関係が絶たれてしまうのではないかとこの恐れが存在していない場面である。それで、この変数を孤独感によって測定している。このような測定方法の違いも結果の不一致を生じさせたのではないかと考えられる。

一方、女性のほうが男性よりも価値ある関係を失うことへの恐れや不安が強いという性差が見い出されており、Mathes et al. (1985)の結果と一致している。これは、対人関係は男性より女性にとって重要なものである (Hoyenga & Hoyenga, 1979) ことが原因ではないであろうか。

最後に、本研究の反省すべき点でもあるが、本研究もMathes et al. (1985)の研究も、「どれくらい嫉妬を感じるか」というように、嫉妬を非常に直接的に測定している。しかし、嫉妬とは、怒り、不安、憂鬱、敵意など様々な感情が混ざりあった複合感情であり、それを1つの項目で測定することにはやはり無理があるのではないだろうか。これまで、個人特性としての嫉妬 (各個人がどれくらい嫉妬深いか) に関しては多くの尺度化がなされているが、特定の状況における嫉妬の強さを測定する尺度に関してはほとんど考案されていない。今後、嫉妬を検討する際には、嫉妬の構成要素や嫉妬の構造を明確にし、嫉妬という感情の測定尺度を作成すること、そして、羨望、ねたみなどの嫉妬と関連した感情との違いを明らかにすることが必要であろう。

## 引用文献

- Bohm, E. 1961 Jealousy. In A. Ellis & A. Abarbanel (Eds.), *The encyclopedia of sexual behavior. Vol. 1.* New York: Hawthorn. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement, inadequacy and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291-309.)
- Clanton, G. 1981 Frontiers of jealousy research: Introduction to the special issue on jealousy. *Alternative Lifestyles*, **4**, 259-273.
- Darwin, C.R. 1888 *The descent of man and selection in relation to sex.* New York: Hurst. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement inadequacy and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291-309.)
- Fenichel, O. 1955 *The psychoanalytic theory of neurosis.* London: Routledge & Kegan Paul. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement inadequacy

- cy and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291–309.)
- Hoyenga, K., & Hoyenga, K.T. 1979 *The question of sex difference: Psychological, cultural and biological issues*. Boston: Little, Brown & Co.
- Jones, E. 1930 Jealousy. *Die Psychoanalytische Bewegung*, **2**. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement, inadequency and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291–309.)
- Mathes, E.W., Adams, H.E., & Davies, R.M. 1985 Jealousy: Loss of relationship rewards, loss of self-esteem, depression, anxiety, and anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1552–1561.
- Mead, M. 1931 Jealousy: Primitive and civilized. In S.D. Schmalhausen, & V.F. Calverton (Eds.), *Woman's coming of age*. New York: Horace Liveright. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement inadequency and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291–309.)
- Spielman, P.M. 1971 Envy and jealousy. *Psychoanalytic Quarterly*, **40**, 59–82.
- Westermarck, E. 1936 *The future of marriage in western civilization*. New York: Macmillan. (Cited in White, G.L. 1981 Relative involvement inadequency and jealousy: A test of causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291–309.)
- White, G.L. 1981 Relative involvement, inadequency and jealousy: A test of a causal model. *Alternative Lifestyles*, **4**, 291–309.